
落日の音

もいもい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落日の音

【ZPDF】

Z8061V

【作者名】

もいもい

【あらすじ】

とおい音。

輝き あこがれ かなしみ。

諦めていれば、なにかかわっていただろうか

?

国を失った姫が、見出だす思いとは。

タイトルは、『落日の音』（おちのこゑ）と読んでください。

争乱の音が遠くにきこえる。

なにかが燃える音も。

でもとおい。
ずっととおい。

いつすらと田をあける。

霞む天井。亀裂の入った壁。倒れた椅子。散らばった硝子。砂だらけの床。抜き身の短剣。

ゆっくりと身を起こす。

髪や頬についた砂が、パラパラと零れた。

ゆるゆると短剣に手を伸ばす。力が入らずに、また床に崩れた。

とつをに腹をかばつた。腹に片手をあて、かるずると這つてまづまづて進む。

長い衣が無惨にも破ける。

わたしは なにが したいのだろう

息が上がる。

夢中で手を伸ばす。

勢いのままに剣の柄を掴んだ、そのとき

「なにをしていの」

矢を射るような鋭い声が、響いた。

一

あたたかい……。
だれか、手を握ってくれているの?

ああ、そうか。
かえつてきてくれたのね。
また、あそぼう。
幼いあの頃のよう

「……キールド」

「お田覚めでござりますか」

はつとして瞬いた。
目に映るのは、穏やかそうな初老の男。少しの笑みを湛えて、わたしを見下ろしている。

「君はいかでござりますか

なだめるよつた声だった。

「すこし……だるい……」

先ほど覚醒したはずなのに、いら答えは存外頼りないものだった。

「左様でござりますか。どうかお痛みはござりますか」

「いいえ、と応えるかわづかふると首をふった。

「脈は」「安定なさつ」「ござります。長の行程のお疲れかと存じます。今少しお休みになられれば、すぐにも」「回復あそばされましょ」「う」

「……脈？」

なれば、先ほどの温もりは」のかたのものだつたのね。ぼんやりとそう思つていたのを、穏やかな声が遮つた。

「恐れながら、先ほど御身をお清めさせていただきました。……何事も、どうか」「案じぬされませぬよ」「う」

「何事も……？」

その刹那、今度こそ鮮烈に目覚めた。

「……つ……」

勢いよく起き上がりうとして、ひどく焦つた様子の声に止められた。

「なりませぬ……突然にこのよつなことを申し上げて、お許しください。ですが、どうかお心安らかに」。なんの」「心配も要りませぬ」

「そんなこと……」

ひゅう、と喉が鳴る。

くるしい。
胸が、くるしい。

ああ、そうか。

助かったのだ、わたしは。
助かつて、しまったのだ

。

やわらかい笑顔のひとだった。春の陽のよつ。

＊＊＊＊＊＊＊

目覚めて一日が経つた。

こちらに来るまでの一日間も、わたしはずつと眠り続けていたらし
い。

気がつけば見知らぬ土地の城で、見知らぬ者たちに囲まれていた。

肌掛けを纏つて、緩やかに庭園に向かつて歩を進める。陽が落ちる
頃に戻れば良いだろう。それまではまだ幾分か暖かいから。

ぱし、ぱしと、踏むたびに乾いた音の鳴る落ち葉を見つめた。祖国
いや、故国でも 幼い頃、季節になると落ち葉を踏んで毎年
遊んだ。いつの頃からか、それはしなくなつたけれど。それでも、
いつも傍らにいてくれたひとを思いながら季節を眺めた。

いつしか無心で落ち葉を鳴らしていた。
ひゅう、と風が鳴る。

落ち葉がからからと舞う。肌掛けが重たそうにさらわれた。

「あつ」

指の間を風が通り抜ける。

落ち葉が、舞う。

からか
からか

風が鳴る。

足下の葉も、すべてさざうして。

落ち葉は舞う。

ゆつくりとだれかが肌掛けを拾つ。

思ひ出せ、とまつてやれるだらうか。

そじてむひじが、あなたであつたならば。

「なにをしている」

乾いた声が響いた。

あのとき、同じだ。

氷の刃のよう。ひん。

けれど滾る炎のよう。ひん。

ひどく、乾く。

「陛下」

礼をとひつと膝を屈めようとしたが、思いがけなくそれは制された。

ふわりとやわらかいものが肩を覆つた。先ほど落とした肌掛けだつた。

「よい。身体に障る」

「……恐縮にござります」

「それよつもなにをしていた」

落ち葉を

踏んでいたと、言えばどう返されるだらうか。

子どものよつて無心になつて。

なんと呟つだらつ。
わたしを、わたしを……

「わたしを憎んでいるか」
真冬の夜空のよつた瞳が、わたしを捉えた。

あのひととは、正反対だ。春の陽のよつた、あのひととは。

はらり、と葉が落ちる。

「 愚かなのは、わたしです」

また、葉が落ちた。

三・(後書き)

構成上、もうじばりく一話一話を短く掲載する予定です。申し訳ありません。

また、モノローグの描[写]ももう少し続きます。

これ以上は身体が冷えると言われ、横抱きにされて室に向かった。肌に触れた刹那に、ほんのわずかに感じたような疑問は、けれどそれと認識する間もなく霧散した。

遠ざかる庭園から城の北側の森に見える湖に、ぼんやりと田を移した。西日に湖畔の木々が照らされ、水面に濃い晩秋の影を落していた。国境とはいえ、故国から一日移動しただけとは思えぬほど、目にした土地は開けた眺めだった。長きに渡つて戦争の絶えなかつた故国の王城は、遙か眼下に城下を望んだものであったのに。湖を城のこれほど間近に見ることができたなど、驚いた。地平はどこまでも穏やかであるように感じられた。

「 今少し、ひと用ほどひらひらで過ります。雪が降りはじめたらこちからは離れる」

唐突に頭上から声が降つた。

「こちからは、もつ城は見えないのですね」

声には答えず、窓を見つめたまま呟いた。

つここの間まで国の境界であつた湖の奥の深い森は、多くを遮る。故国の城も、熱も、温もりも、光も。

「 素ずることはない」

いつの間にか歩みを止めていた声のまつを、今度は顔を上げて見つめた。

『氣休めなのだろうか。わたしに構つことなどないの』。それこそなぜわたしに……

「お方様」

若い女の声がした。それが室付きの侍女で、なおかつわたしを呼んでこるのでと氣づくまでにわざかに間を要した。

「侍医がお室に参つております」

やついえば、あの穏やかな声のひともわたしの身を案じていた。思わず顔がゆがむ。

なにを心配する」とがあるとこつのだらつ。

「心配事など、なにもあつません」

だつてわたしが恐りしことせ、この國にかなこのだから。

ラヴェンナ、ぼくはもう吹かないよ。
かなしみの笛しか、吹かない。

大 大 大

「あはは、ラヴァンナ。それだとすぐこいつがまえられぬよ」
「せえつたい、だいじゅうぶ。だつてかやんと、れんしゅうしたも
の」

えつれんしゆう? 違いか? こ? 」

「『おとづね』って……。あはは、よくやるね、ラグーンナ。」

一国の王をつかまえてさ」

おどりはわたしをかわせなかつたね
あどりも、ござつたこむり
だから

「ハーン、あなたの『おとづれ』は、姫わざにせよわこわこ

からなあ……」「

いいから。はやくそこへたつて。わたしが、いいつていうま
で、ハリーがまだかぎりない。

「……ほひ。つかまえた

「ああーー。すつむーー。ずるこわ、かーるどーー。」

「あはは、『めんラブ』ンナ……って、つわあーー。』、『あん。』

「めんよ。あやまるから、なかなかいでよ」

「ゆ、ゆるじてあげないわつ。ふ、ふえをふいてくれるまで、ゆる

してあげないーー。」

「じやあ、笛をふくから、なみだをとめてね」

きーるど のね、ふえのあと、だいすき

とっても 美しい

とっても あたたかい

あしたも、あそぼう

また、あしたも

ふえをふいてね
すつとすつと

わたしの過（い）す室にはいくつかのリボン刺繡がされた装飾品や小物が置いてあった。ほかにも、久しく目にしない綺羅な宝飾や調度品がしつらえてあり、南に面した室の窓からの日差しにまぶしく映されている。

近くにある宝飾箱のひとつを、手にとった。質感をたしかめるよう、に、ゆっくりとリボンによつて刺繡された撫子の花をなぞつた。晚秋にあつてめずらしい日和に、撫子の薄紅が淡く光る。

思わず、といったほうがよいだらうか。思わず、ふれてしまつた。もう随分と刺繡などしていない。秋のちいさな輝きを体现したようなあたたかな色合いに、人知れず顔がほころんだ。

むかしは、刺繡をよくしたものだつた。母に教わりながら、たどたどしい手つきで。それほど得手ではなかつたから、刺繡をするときは、『むずかしいお顔をなさつているわよ』と、そのたびに微笑を返された。それでも、よく刺繡をした。上達して、見てほしいと思うひどが、いたから。

髪を結ぶためのリボンにも、刺繡をしたことがあつた。とても上手てきて、気に入つて使つていたけれどすぐに失くしてしまつた。

予兆だつたのだろうか。
わかつっていたのだろうか。

リボンを失くしたことに気づいたとき、城は、一度目の、狂氣の血に染まつた。

「もうすぐだ」
声が、冷冽に空気を裂いた。

乾く
ひどく
なにが？

そのひどが手にしていたのは、笛だった。

あなたが、奏でた。

たすけるから 韻を かなうす

* * * * *

「キールド、お城を出でていへつて、ほんとうへ・」

「うん。十八になれば、だけどね。少しの間、遊学しようかと思つているんだ」

「やうなのつ？……わよしくなるなあ……。でもつ、あと二年ま、これからにこるのよね？」

「やうだね。たくせん勉強して、すぐこいかえつてへむよ」

「……ゆうがく、しなきや、お勉強はできないの？」

「そういうわけではないよ。ただ、この国は、ずっと戦争をしてきたから」

「せんそつ……」

「きっと、今が特別なだけなんだ。これからは、なにが起るかわからない。だから、勉強しに行くんだ。いろんなことを、見てくるんだ。この国が、ずっと平和であるように」

「やうなの……」

「……ラヴォンナ、そのコボン、素敵だね」

「ほんとうー？ これね、とても上手につくれたの。今まで、きっと、いちばん。……わつ、きやあつーー。すいこ風つ。いたつ、いたい。落ち葉があたつて、いたい」

「……ラヴォンナ、きみ。……あは、あははは。頭と顔に、落ち葉が、あははつ」

「えつ？ な、なあに。そ、そんなに笑つことないじゃない」「い、ごめん。でも、きみが踏んで遊んでいた落ち葉たちの仕返しじやないのかな。細かくなつたのが、顔について……あはは

「そ、そういうキーランドだつて、落ち葉まみれだわつ」「じゃあ、おそろいだね」

「やだあ、なあこ、それ」

諦めていればよかつた
願わざにいれば

そうしていたならば、わたしたちが、なにか、かわっていた？

ねえ？

キーランド

「……吹けない」

懐にしまっていた笛から唇をはなし、息をはいた。

笛の音がでないことに、知らずわざかに安堵しながら。

「ひがひおられたのですか」

落ち葉を踏む乾いた音と、すでに聞きなれた侍医の、穏やかな声に振り向いた。

「ごめんなさい、もうそんな時間だったのね」

音をだすことに夢中になっていたらしい。石畳にはすっかり茜色が差していた。

「……キールド様のお笛でござりますか

問われた、にわかには信じがたい言葉に、息をのんだ。

「なぜ、それを

「わたしも、七年前の政変を逃れて参りました」

枯れ葉が、音もなく地に、触れた。

「ときは、次々とわたしを、わたしたちを翻弄します」
そう言って、穏やかな声を老いた手に落とした。

「後悔を置き去りにしてなお、償いすら、赦されることがなかなわす」
入り口はなお濃く、木々の枝に色を落とす。

「ラ、ヴァンナ、ぼくはもつ

「…………喪われたかたもまた、そうだったのではあつませんか」

吹かないよ。かなしみの笛しか

胸元の笛を、強く、ひびかせる。
胸が、くるしい。

赦されないところのなまび、わたしのまつだ。
愚かであったのは、わたしだ。

「…………なぜ。なぜですか。わたしをそれまで、心配なれるの
は
あのひとも。

「わたしが」

＊＊＊＊＊＊＊

「なぜ、なぜ……！」のよつなものを、わたしに

突如として、視界が真つ赤に明滅する。

顔をおおひ。

息をつめる。

涯のない、静けさに言葉をうしなう。

かなしみは、そいでなお、戯れに零れ落ちる。

音は、いたみに沈む。

熱は、甘露に染まる。

「 望んだのは、そなただけではないからだ」

ちがう。愚かな望みかたをしたのは、わたしだ。

「こわしたのは、わたしです」

あの輝きを、あこがれを
ぬくもりを、光を

熱に、染まつてしまつたから。

＊＊＊＊＊＊＊

「わたしが」

これ以上は言葉をのんだ。
事実を語つてしまつてはもう、戻るひとはできない気がするから。

恐ろしこじとなど、ない。

恐れてこぬじとせ、じじにはない。

だつて音はもつ、きじえない。

とおもふ思ひ出の、あの日から。

春の暁 夏の木漏れ日 秋の落陽 冬の星影

* * * * *

遙か切り立つ山肌に、河を吸い上げ、岩を浚い、石壁を叩く風を巻き込み、最上の塔の旗は揺れる。砂塵は足下を哄笑するかのようにな歩廊を流れた。

手にしていたはずの手紙を、風はいよいよ居丈高に喧い、うばつた。

「まつて！！」

堅牢な壁に、風は冷たく反射する。舞いあがつては、とまり。舞いあがつては、とまる、先ほどまで手の内にあった手紙を追いかけた。

手蹟に残されたぬくもりを求めるように、手を仰ぐ。

ザ

ザアアアアア

迷乱する落ち葉が、眼前に迫った。
朽ちた庭園にあってなお、落葉は木靈した。

「 ラヴェンナ」

「。 ！」

「どうして」

「 戻ってきたんだ。君を、たすけるために」
「わたし、手紙を、なくしてしまった」
「持つていくれたのか」

「 ラヴェンナ。泣かないで」

「ラヴェンナ」

「すまない、ぼくはまだ。かなしみの笛しか、吹けない」

「ラヴェンナ。たすけるから。君を、かなづ」

* * * * *

大切なものは、あのときに失つてしまつた。
気に入つていたリボンも、父も母も、^{くに}祖国も。

ただひとつをのぞいては。

たつたひとつのおこがれ。
たつたひとつの光。

＊＊＊＊＊＊＊

「お方様。お手がとまつておいでです」

わたしを呼ぶ室付きの若い侍女の声に、手もとに皿を戻した。
布を刺したままの針は、その中ほどでとまつっていた。

「お上手でいらっしゃるのですね」

わたしの手もとの刺繡を見つめて、侍女は言った。

「そんなことはないわ、だつて随分と久しぶりだもの」

ただ、この花の刺繡に関しては、慣れているというだけだ。

「……それまでで、いちばん上手くできたのはね、撫子の花だ
つたの」

あたたかな輝きは、あのひとのようだった。

春の陽のようにやわらかで。

山花のよう、ただ静かに。

だから、すぎだつた。花も、笑顔も。

萌えいするみのりの、きらめきをあらわしているかのよう。
やさしい夕日、つままれているかのよう。

「だけど、なくしちしまつた」

それは、いつ？

＊＊＊＊＊＊＊

「一度ならず、一度までも。こんなこといつ……」

＊＊＊＊＊＊

「お方様。笛が……」

膝においていた笛が、いつの間にか床に転がっていた。

侍女の手が、笛を拾いあげた。

「この笛をお持ちだつた御方は、
侍女の手が、笛をにぎる。

ラヴェンナ

ぼくは、ゐるをない。

君からすべひをつまつた

ぼくの、父を。

身体を刺すような風が、あたたかかったものの名残すら、うばい去る。

ただ轟々と音は流れ、数瞬まえの輝きをまた、連れてゆく。恐れを知らぬ弔鐘だけが、惨禍の嘆きをなでていった。

「……キールド」

音が、きこえる。

あなたの、音が。

でもとおこ。

ずっととおい。

かなしみの音は、いつ、かえるの
おさなき音色に、いつ、かえるの

* * * * *

ぐずれ落ちた景色に、立ち尽くした姿が滲んで、映つた。

「 ラヴェンナ、ぼくはもう吹かないよ。かなしみの笛しか、吹
かない」

痛みに沈んだ瞳は、伏せられた。

「 鎮魂の笛を、奏でよつ。祖国を、取り戻すまでは」

「 ……とつもどす……？」

「ぼくには、それしか赦されない。いや、それすらも、やつと。けれど」

「わからない。キールド、わからない。どうして？」

「 ラヴェンナ。泣かないで
ひどく冷たい手が、頬をすべった。」

ぬくもりは、どこへ、いつたの
あの、あたたかい、ひかりは

＊＊＊＊＊＊＊

あたたかい……。

なぜ？

どこに、あるの？
いつ、かえるの？

あの、輝きに

「 ラヴェンナ」

目をあけた刹那に、真冬の夜空のよつたん瞳とかち合つた。

「陛下」

「探した。なぜ、あのよつたん場所に」

白い息が舞つた。

間近にある熱を急に感じ、思わず身じろぎした。知らぬ間に、外套でくるまれていた身体に気づいた。

「……申し訳ありません。すぐ、戻るつもりで……いつの間にか、

うたた寝を 「

「 いつの間にかでは、ないつ！」

深閑な夜の冷氣を、怒声が破つた。

「 かような時候に。なにを考えている

見上げた瞳は、厳冬の星影のよつに、冴え冴えと光る。

「 大事に至れば、いかがする」

「 ……大事？ 大事とは、なんですか」

懷に、手をあてる。かたく手を、とじる。

「 なぜ、いつもそのように 諦めている」

「 諦めている？ わたしが？」

この声は、なぜ、じんなに響くのだろう。
冷たく、胸に刺さるようだ。

「 諦めてくるだろつ。 なぜ、キールドがその笛をわたしに託したと思つ」

「 つー あなたはつ。あなたは、なぜ……つ。なぜなのです」

なぜ、わたしに、構うの。
なぜ、わたしに、触れるの。

「 わたしには、いつあることじしか

……

乾く
ひどく
一体、なにが

ぼくには、それしか赦されない。いや、それすらも、かつ
と

後悔を置き去りにしてなお、償いすら、赦されることなか
なわざ

声が木靈する。

迷い込んだ落葉が木靈する。

「わたしはなにも、望んでいません……」つ

壊の笛を、握りしめる。

音は、とおい。
失くしてしまつた。

春の瞳が、伏せられた、あのとき。

その季節を そのめぐりを 畏はどひか

* * * * *

背筋に寒さを覚えて、震えた。
せりあがつてくる不快感に、口をおおつた。

「 お方様？ いかがされました？」

身体が傾いだせいで、手にしていた縫いかけの刺繡が床に落ちた。
侍女が駆け寄る音がきこえた。

「 じじばらくは、治まつていたというの。」
いえ。こちらに来てからは、なにもなかつた。

「 ただ今、侍医をお呼びして参ります」
侍女の足音が遠ざかっていく。

ふいに。ぐらつ、と。

景色がゆらいで、とうとう床に膝をついた。

気がつかなかつた。

手が、腹をかばつていた。

砂だらけの床に。散らばつた硝子の破片が、見えたような気がした。

そして 短剣。

そう、短剣を掴もうとした。

そして、それは今も。

硬質な感触を、懷にさぐる。
剣が熱をもつ氣がする。

わたしは なにが したいのだろう

音は、とおい。

ならば、おわつたのだ。
だから、おわる。

ならば、かえつてくる。
なにもかも。

手のひらに、ざらついた感触が伝わる。
砂 ではない。床に落ちた刺繡の、縫いかけの、撫子。

かえつてくる。

失くしたものは、きっと。

＊＊＊＊＊＊＊

「冷え込んで参つましたゆえに『やれこましょ』。もつまもなく、雪も降りましようから」

わたしが横になつた寝台の傍らに立つ侍医が、穏やかに言った。

「大事は『やれ』ませぬ。ですが、お身体を決して冷やされてしませぬ」

なだめるように、諭すようにするその声は、横になつたわたしの身体にゆつくつと漫透する。

顔が、ゆがむ。

胸が、くるしい。

「なにとぞ、『やせじ召されませぬ』よつて

また、なだめるように声が降りた。

なんのために、一田と置かず侍医が室に來るのか。
なぜ、心配されるのか。

本当は、もう。

最初から、ずっと。

わかつて、いるのに。

……あたたかい。

＊＊＊＊＊＊＊

ゆづくとすぐる熱を、頬に感じた。

「大事ないか」

ほんやりとした意識のなかで、声が木霊する。

落ち葉を巻きあげた風が、庭の窓にあたる。
深閑なかつての国境の森が、ざわめく。

「もうすぐだ。もうすぐ……」

あのひとの名をやれやく声が、きこえた気がした。

十一・蹟・（前書き）

蹟・
（わざ・こづ）とお読みください。

「「」の者に、覚えはあるか

灯火に揺れる影が、音もなく壁に這つ。

硬質な声は冷たい壁に翻つてなお、冴え冴えとして響いた。
氷のように、瞳は射る。

「……」

＊＊＊＊＊＊＊

「その、旗は……」

固く手に握られた、汚れた長い柄を見つめた。

「「」の最上の塔のものだ」

ああ。

落ちたのだ。

城は、落ちた。

「……」

短剣の柄を握りしめた。

ざらついた砂の感触が手のひらに伝つ。

その、刹那。

「……………」

「やめてやめて」

「……………」

はなし。
おねがい。

あなたが笛を吹くときは、争乱のとき
ただ鎮魂の音を奏でるために

音が、しない の なら

「音は…………」

「ラヴハンナ」

「…………」

やはり、やうだつたの。

この名を呼ぶのが、キールド。あなたでないのなら。

「ラヴハンナ」

突き刺れる。熱く、乾く。

「終らない。まだ、終わらない」

風 が

唸るよくな烈風が、巻く。
砂塵を。衣を。髪を。

風が、弔鐘を鳴らす。

今はない、落ち葉も 手紙も
すべて 滲つ。

たすけるから 君を かなりず

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

氷のように、瞳は突き刺される。

「こゝの者に、覚えはあるか」

「……」

「ラヴェンナ」

なんて、似た面差し。

どうして、春の瞳ではないの。

「ラヴェンナ。終りだ。今度こそ」

声が、胸に 刺されるのは
氷のように 韶くのは

「こゝの、者は

「……」

同じに。

失つて、しまつたから。
このひとも。

「キーレドから國を。すべてを」

奪つた者。

泣いていたあの子の頬は、あたたかかった。

＊＊＊＊＊＊＊

『なんと、無茶なことを……』

『確認が欲しかった』

『それにいたしましても。お方様は、身重でいらっしゃるのですよ』

『……その通りだ。ただ』

『そのよつなお顔を、なさいますな』

『……うしなったものは、もどりては参りませぬ。陛下』

『キールド様は、いつも。あなた様の、おそばに』

ぼんやりとした霞のなかで、瞳が痛みに伏せられたよつに見えた。

＊＊＊＊＊＊＊

親愛なる

君の匂を書くのは、きっとこれが初めてだろうな。

君とみたあの湖は、いまでもきっと穏やかなのだろ。

親愛なる シュライゼ

君は覚えているだろ？

初めて会ったときの、ぼくの顔を。いまぼくは、あのときと同じ顔をしているだろ？

もうじれぼく君の国で、ぼくは君と田口を過（）しただろ？いや、四年という田口は、そんなに長くはないのかも知れない。なぜこんなに、やさしく感じるのだろう。君と過（）した日々を決して、楽しいものではなかつたはずなのに。そしてそれは君も、同じだつたはずだ。

君の国に初めて來たとき、なんて穏やかで平和な國に來たことだらうか（いや、そんなことはわかつてはいたはずなのに）、やう、なんて穏やかな國に來たものかと、ぼくはなかば君を憎んだ。

君の抱える苦しみをなにも知らぬまま。

もう書くまでも、ないだろ？

ぼくは、古くから争いの絶えない國に生まれた。

ぼくのじく幼い頃を最後に戦争は終つたけれど、城の堅牢な石壁は、いつも冷たかった。

それからは静かに、ただ静かに時は流れていった。

だけどあるとき、その静寂を打ち破る光が生まれたんだ。
ぼくにとつては、それは光だつた。

その光を初めてみたとき、ぼくは驚いたんだ。
こんなに無垢で、こんなにかわいいものがあるのだと、そんな歡喜
にあふれた感情を、まだ幼かつたけれど、そのとき初めて知つた。

もうなんど君に話しただらう。

ぼくは、その光　いや、ラ・ヴェンナと、ずっと一緒に遊んで育
つた。

たしなみとして母から『えられた覚えたての笛を、ぼくはくる田も
吹いて、あの子に聽かせた。

あの子はお姫さまなのに、口を大きく開けて、よく笑う子だつた。
それにぼくの吹く笛を、田を輝かせて聴いてくれていた。

あの子の父君と母君　いまはもう亡くなられた国王陛下と王妃
陛下は、あの姫を殊更に大切になされていた。
ぼくの母と王妃陛下はとても親しくて、母はよく王妃陛下を訪ねて
いた。

あの子が生まれてからも、それは変わることなく。
そうして出産つたあの子は、ぼくにとてもなついてくれた。

春に、暁を。

夏に、木漏れ日を。

秋に、落陽を。

冬に、星影をみつめながら、そのめぐらを、ともに過いじた。

いまだ、瞳をとじると浮かんでくる。

あの子の、輝くような笑顔が。

ぼくに笛をせがんだ、あの無垢な瞳が。

あの、光あふれる季節が。

その季節のなかでぼくはいつしか、願っていた。

あの子がずっと笑つていられるような、争いのない穏やかな国になるようのこと。

そして望んだ。あの子の永久の笑顔を。

あの子はね、撫子の花がとてもすきだつたんだ。
刺繡にして、髪を結う飾りにしていたくらいに。

ぼくがそれを褒めると、とても嬉しそうにしてくれた。

きっと、あれが最後だ。

あの子が笑つたのは、あれが最後だ。

そのまま、ぼくらが過ごした城は、血に濡れた。

狂氣の血に染まつた。君も知つてはいるよつに。一度目の、政変が起
こつた。

けれど。

けれどシユライゼ。

あの子の頬は、あたたかかった。

泣いていたあの子の頬は、あたたかかった。

いまはもう、あの子と遊んだ庭園は枯れた。
あの子は、いまもまだ泣いている。あのときと、同じこ。

変わりず。あのトナリにも変わりず。

トナリセイ

どうかまへの願ごとをあこへくれなーか

十四・讀・三（前書き）

一部、『十・』の冒頭に対応しています。

君が言つた言葉を、こんなにたちで君に返さなければならぬんて。

ぼくは、なんと處外なのだつ。なんと傲慢なのだつ。

深い茜色が湖面にきらめきをまぶしてゐる。

それは空をもうひとつ見つめているようだ。

青年はひとり湖畔で、笛を吹いていた。

「なぜいつもこの場所で笛を奏でる」

今しがた言い争つた声の主に、振り返らずに青年は答えた。

「あの子に、笛くわつ。いいや、笛にてほしくはないかも知れない」

「……なぜ」

「ぼくが鎮魂の笛しか吹かないことを、あの子は知つてゐるから。ぼくの笛の音が聽こえることを、きっと恐れてゐる」

青年は笛に皿を落とした。

「……わつわは、済まなかつた。シュライゼ」

「いや。気にしていない」

「こんな穏やかな国に、争いがあるなんて。幼い頃から、ずっとこの国は平和なのだとつていた」

「穏やかであるのは、景色だけだ。人の心は、荒れる」

「ぼくはなにも知らなかつた。君は、手にしたかつたんだね。争いのない国を」

「そうだ。だが。わからない、未だに。正しかつたのか。もう、五

年も前の話なのに

「ぼくがここに逃れて来て、もう四年だ。ここに来なければ、ぼくはこんなにも平静では暮らせなかつた」

青年は、穏やかさを慎ましく湛^{たた}える湖に目を戻した。

「ぼくは、君のなにを見てきたのだろうか。こんなにも、ともにいて。父のこともなにもわからなかつた。政変を起こすほど、あの国がほしかつたなど」

「近くにいても、わからなうことばかりだ。わたしの父も母も兄弟も、心は通わない」

「……生きて、いるのに」

「そうだ。心があれほど通わなくて、ともに暮らす意味はない」

「君は、排除しなければならなかつた。腐敗を」

「あれ以上争つて、戦いにでもなれば。そのよつに無益なことはない」

「だから、家族を、臣を追放した」

「……人を殺さずとも、人の心は死ぬ。人が生きずとも、人は心に生きる」

「……シユライゼ」

湖面に風が吹き抜ける。

青年は湖をひたと見つめる。

濃い茜色が、青年の瞳を染める。

「君は、正しい」

青年は湖を見つめ続ける。

「シユライゼ」

彼は手の内の笛を、握りしめる。

「ぼくはあの地にかかるよ。この音を、終わらせるために」

風が、青年の髪をなでる。

「あの子はきっと、ずっとあの口から感れていただろ？」
「恐れている、ところのね？」

「鎮魂の音が聴こえること。鎮魂の音が聴こえないこと」

青年はふたたび笛を構えた。

音は、湖面を渡り、風に乗り、森を伝つ。

茜色の湖水をすべる。

湖面に落した葉陰がゆれる。

入り口は濃く、濃く、落葉を染める。

けれど湖水はきらめく。

澄んだ音を、光とするよひ。

湖水の茜が、一層のかがやきを帯びる。

光が、笛を照らす。

音が、落日に染まる。

落日に、音がつつまれる。

青年は、口を、閉じる。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

済まない。シュライゼ。

いまほくは、どんな顔をしているだろ？

君の国に来たときは、違う顔をしているだろ？

また恐れを抱き、憎しみを抱いているだろ？
だけど。ただひとつ、この胸にあるものを、叶える。

いまはただもう、そのことしかない。

ずっと、忘れられない。君の、かなしみに満ちた姿を。

ずっと忘れないのに、わかっているのに、ぼくは、君に願ってしまう。

どうか叶えてほしい。君が望んだ国があるよ。ぼくが、またひとつ君の失うものになると。争いが、いつまでも果てないの。父があの子を苦しめるなら。

あの子を救う道は閉ざされてしまった。

祖国の再建を誓った仲間を喪ってしまった。

この地に戻つてからの三年の月日は、水泡と帰した。

君に頼むしかないんだ。どうかもう。終わりにしてほしい。君が、終らせてほしい。

『人が生きずとも、人は心に生きる』

君のこの言葉を君に返すぼくは、赦されるべきではない。

シユラライゼ、ぼくはあの子に、なにも伝えていない。あの日からずっと。

だから笛にこめる。

笛をあの子に渡してほしい。

託す笛は、君の来訪を、待つ。

これは成し遂げられなければならぬ。

ぼくは父を討つ。

城を崩してくれ。

あの子を頼む。

「あの地に、お帰りになるのですか」

壯齡を幾分過ぎた侍医は、そう青年に訊いた。

「もともと逃げられるものではなかつた。戻つて、祖国を再建する。どれほどかからうとも」

侍医は、青年の持つ笛を見つめて言つた。

「あの国で、あなた様と王女殿下に直接お目見えしたことばございませんが、あなた様がお吹きになる笛の音は、いつも聴ひ入でございました」

お優しい、慈しみあふれる音色で、じびこました。と懐かしむように目を細めた。

青年は視線を笛に落とした。

「ぼくは優しさも慈しみも持つていない。ただ浅はかで、傲慢で、それが比べようもないくらいに愚かだ」

「いいえ。わたしはそうは思いません。あなたはお優しい。あなたが、王女殿下をどれほどお思いでいらっしゃるか。これまであなたを拝見して、わからぬはずがないじきこません」

青年は笛を硬く握つた。

ラヴェンナ。君にこの思いを伝えることができない。心がこわれるほどの喪失を負わせてしまうかも知れないから。けれど、ぼくの望みは君だ。君だけだ。

君が生きてくれるなら。どんな慮外にもぼくはなれり。

「キールド様。どのような償いも後悔も、誰もが負つてゐるのです

その言葉に、いつの日も変わることのなかつた少女の笑顔が浮かぶ。

いつかに、少女に綴つた手紙。
彼女は、覚えていいるだろうか。

暁も木漏れ日も落陽も星影も
めぐる光はいつも
あの子とともに。

十六・蹟五（前書き）

『九』と『十』に対応しています。

少女は泣き濡れた顔でこちらを向いた。

少女の顔を見た少年は庭園に立ち去った。

今しがた起きた惨劇を信じられる術を、少年は探したかった。

景色のすべては、色褪せた。崩れ落ちていた。

「ラヴェンナ、ぼくはもう吹かないよ。かなしみの笛しか、吹かな
い」

つい数瞬前まであった庭園の輝きは、そこにはなかった。

「鎮魂の笛を、奏でよう。祖国を、取り戻すまでは

思い出は、今、この時から凍る。

かなしみで、全身が冷たくなる。

「……とつもどす……？」

「ぼくには、それしか赦されない。いや、それすらもきっと」

償つことなど、できよければずがない。この少女の失ったものをふた
たび返す以外では。

「…………ラヴェンナ。ぼくは、ゆるさない。君からすべてをひざ
つたぼくの、父を」

その意味を瞬時に悟った少女は、首をふった。

「わからない。キーレド、わからない。どうして？」

ゆれる少女の髪に、幾日か前にあつた撫子なでこを刺繡したリボンはなか
つた。

刺繡が得手ではなかつた少女が、きつと懸命に作ったであろうその遊学すると話したことに落ち込んだ少女を元気づけようと褒めたりボンだつた。

あの撫子の飾りは そう訊こうとして、やめた。失くしたのかも知れない。もう、これ以上失くしたものの在り処を問うてどうするのだろう。

「 ラヴェンナ。泣かないで」
少年は少女の頬に手を滑らせた。
少女の頬は、あたたかかった。

どれほど月日がかかつても、必ずきみをたすける。
たとえ、父を弑^しすることになつても。

* * * * *

娘は背を向けて歩廊に立ち去^くしていた。

青年はかつて祖国と呼んだ城の、朽ちた庭園を見つめた。
迷乱する落ち葉が青年の足元を流れた。落ち葉を眺めて遊んだ在りし日の少年だつた頃の面影を乞うように。一人の思い出を悼むように。

思い出が青年の胸に飛来する。朽ちた庭園にあつてなお、落ち葉は舞う。思い出が木靈する。

青年は硬く目を閉じた。

娘の、名を呼ぶ。

「 ラヴェンナ」

娘は驚きに、立ち尽くす。

「 どうして」

「 戻ってきたんだ。君を、たすけるために」

娘は呆然と青年に告げた。

「 わたし、手紙を、なくしてしまつた

「持つていてくれたのか」

いつかに送つた一通の手紙。

きっと大切に持つていてくれたのだろう。

ならばまた、大切なものをひとつ失わせてしまった。

青年は痛みに沈んだ瞳で娘を見つめた。

娘の頬に、手を滑らせた。

「 ラヴェンナ。泣かないで」

思い出は、あの日から凍つた。

けれど娘の頬は、あたたかかつた。泣き濡れていたあの日と、変わらず。いつの日も、変わらず。

取り戻す。必ず。この光を。

青年は、娘の名を呼ぶ。

「ラヴェンナ」

春の暁

夏の木漏れ日

秋の落陽

冬の星影

そのめぐりを その季節を 君はどうか

「ラヴェンナ」

光は

「すまない、ぼくはまだ。かなしみの笛しか、吹けない」

永遠に

「ラヴォンナ、たすけるから。君を、かなうす」

君のなかに

「一度ならず、一度までも。こんなことに……」「笛を握りしめる。近しい者をまた、失ってしまった。わずかにあつた希望の道すら、消し去られた。

弔いの鐘を、鳴らす。

すべての嘆きをなでるよ^{アヒヤム}。

惨禍を濯い流すよ^{アヒヤム}。

す。

道はもう、ひとつしかない。

あの子の望むことはこれからはすべて、叶えよう。

その先はもう、叶えることはできないから。

彼女がいる最上の塔を見据える。

笛を構える。口づけるよ^{アヒヤム}。

彼女が泣き濡れた日から、ついにかなしみの笛しか吹けなかつた。在りし日の輝きに、かえることはなかつた。

『わたし、手紙を、なくしてしまつた』

いつかに送った一通の手紙。

また、大切なものをひとつ失わせてしまった。
自分が、これから行うことは、どれほど喪失となるのだひつ。
彼にとつて。彼女にとつて。

彼女が恐れていることを、している。
彼女が恐れていることを、する。

それは笛の音が、聴こえること。聴こえないこと。
それは争乱の音がするとき。争乱の音が永久にやむとひき。
それは自らの心が死ぬこと。人が、心に生きること。
それは会えること。それは、逢えなくなること。

「 済まない」

あの手紙が、もうないのなら。
笛に、こめよつ。
この思いを。
そして託そう。

彼女が、この思にに気づくことがなくともいい。
気づくときは、じわれるときだから。

気づいてくれればいい。
気づくときは、手にするときだから。

けれども、気づいてほしい。

だつて君は 光だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8061v/>

落日の音

2011年11月20日14時02分発行